

## 1 はじめに

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の『オリヴァー・ツイスト』(Oliver Twist, 1837-38) と『大いなる遺産』(Great Expectations, 1860-61) そしてシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) の『ジェイン・エア』(Jane Eyre, 1847) そしてエミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-1848) の『嵐が丘』(Wuthering Heights, 1847) の四つの作品のなかの主人公たちには、共通点—彼らの置かれた立場と周囲の状況—がある。この三人の作家の共通点と言えば、同時代のヴィクトリア朝期の作家であるということぐらいであろう。その他のこと、例えば作品の舞台や、取り上げている主題、作品の持つ雰囲気は全く異なる。

では、なぜこのような主人公たちの共通点が生じたのだろうか。それを偶然であると片付けてしまうのは簡単なことだが、私はそうは考えない。この問いに対する一つの答えとして、「時代を同じまなざしで見ている」から、ということが言えるのではないか。それには「文学作品は時代を映す鏡である」と考える必要がある。私はディケンズ=社会改革派作家であるとか、シャーロット=フェミニズム文学の先駆者的作家といった一面的な評価には反対である。さらに「文学のための文学」であるとか、他の一切の時代背景やコンテクストを切り捨てて、純粹に文学作品そのものだけを評価するという態度にも疑問をもつ。なぜならば文学作品も他の芸術作品同様、社会に生きる人間の手によるものである限り、社会とは無縁でいられるはずがないからだ。従って、その時代を生きる作家が描く文学作品には、その時代を反映している場合が多いと考えるのが自然であろう。逆に考えれば、文学作品を読むとその時代の人々や社会の大まかな様子が垣間見えるのではないかと思われる。

以上のような考えの下で、先に挙げた三人の作家が同じまなざしでどのように時代を見ていたか、そしてその同じまなざしが作品にどのように見て取れるのかを考えてみたい。こういった私の考えが正当性をもつのかどうか、少なくともその可能性があるのかどうかを「試論」という形で検証してみたい。そのために限られた時代と作品ではある

が、具体的な例を挙げて論じてみたい。

## II ヴィクトリア朝の特徴

ヴィクトリア朝期とは一般に、1837年にヴィクトリア女王が即位し、1901年に亡くなるまでの64年間の治世の時代のことである。この時代はイギリス史の中でもさまざまな点において注目に値する。ここで社会的な背景を概観しておきたい。

何といっても、この時代における歴史上の大きな出来事の一つは、少し時代は遡るが、産業革命であろう。産業革命は一般的には1760年頃から始まり、1830年頃を一応の終わりとする。1830年にはリヴァプールとマンチェスター間に鉄道が開通し、それから10年間に、鉄道網が国内に縦横に敷かれた。蒸気を動力とする機関車、それが疾走する線路を山川を越えて敷く土木技術、燃料の石炭の増産など、鉄道はまさに産業革命の総合技術の結晶であった。ラジオや電信電話の発達により、海外との交信も可能となり、すべてが進歩へ向かって驚進していたと多くの国民が信じて疑わなかった。また1851年のロンドン万国博覧会が産業革命の大きな成果を示す出来事であり、イギリス国民の意識の高揚に大いに貢献し、海外に対してはイギリスの威信と繁栄を誇示するのに役立った。もちろん産業革命を支えていたのは、イギリスが世界の各地に植民地を広げ、帝国主義経済によって、世界中の富がこの国に集中し、かつて無いほどの物質的繁栄をもたらした結果である。さらにイギリスはこの時代に、阿片戦争（1840-2）、クリミア戦争（1853-6）、ボーア戦争（1899-1902）を相次いで遂行し、イギリス帝国の版図を地球上の約4分の1にまで拡大し、まさに「日の沈まぬ国」になったのである。

だが、産業革命の持つ華々しさの影で、諸悪がはびこった。不潔で危険な工場では、非人間的な長時間低賃金労働が強要され、婦人や子供の不法利用もあった。工場労働者には従来の手仕事のような熟練を要求されない代わりに、病気などの不都合が生じれば、簡単に首を切られ失業する。失業者や浮浪者が集まる都市周辺のスラム街が徐々に広がってゆく。極端な生産優先が生む悲惨な世界がこうして誕生した。

歴史の流れが「人類の進歩と繁栄」に向かうものであるならば、産業革命は必然的なものであったであろう。では、産業革命はそれ以外に何をもたらしたのか。それは一つには、機械制大工業の成立によって、これまでは部分的であった資本家と労働者との階級関係が社会的に全面化し、従来からの支配階級であった土地所有者（地主）を加えた上流階級、中産階級、労働者階級の三大階級社会が完成したことである。工業化に基づく階級社会の誕生は、イギリス社会に訪れた革命的变化であった。

土地所有者や貴族が上流階級、資本家を含むブルジョアジーや専門職を中産階級、労働者を下層階級と大別すれば、1840年代に早くも産業革命の成果を享受できたのは、成功を収めた中産階級の人々であり、彼らがこの時代を牽引したのであった。しかしこの時代、国民の圧倒的多数であった下層階級は、産業革命の恩恵にあずかるどころか、「飢餓の40年代」という言葉が示すように、受難の時代であった。確かに、中産階級は確固たる基盤を築き、労働者の地位もある程度向上し、一般大衆の権力も以前より増大したが、産業革命がもたらした繁栄から取り残された人々も数多く、一般大衆があずかった恩恵は、一部の上流階級の人々のそれに比較すれば、微々たるものであったにちがいない。

こうして産業革命は三大階級の完成のみならず、都市化つまり人口の都市への集中をもたらし、さまざまな弊害をももたらした。工場から吐き出される煤煙や廃棄物による公害問題、衛生環境の悪化、犯罪の増大、失業、生活困窮者の増加など、これらは産業革命が生み出した繁栄の世界とは別の、もう一つの言わば、影の世界であった。この影の世界で生きる人々のほうが実際には数が多かったのである。

このように19世紀初頭から20世紀にかけてのヴィクトリア朝期にはイギリス史上さまざまな面で大変革が起きた。それは社会的にも、経済的にも重要な出来事であった。そして文学の世界にも一つの大きな変化が生まれた。それは産業革命の影響のもとに都市を中心とする全く新しい大衆的な社会が出現し、これまで文学とは無縁であった多数の庶民たちが読者となって文化に参入してきたことである。このように社会的経済的側面だけではなく、文学的側面にもイギリス史上大き

な転換期となったのがヴィクトリア朝期である。

### III この時代の作家と作品

文学思想の面では18世紀の理性中心主義が次第に感情重視の傾向強め、18世紀末には詩におけるロマン主義の運動が本格的に始まって、現代につながる人間の問題が初めて文学による表現を得た。小説におけるロマン主義の現われは「ゴシック小説」と呼ばれる恐怖小説の形をとり、非日常的な設定を用いて人間の感情の世界や観念の世界での冒険を描き出した。さらにリアリズム小説の及ばない独自の迫力と真实性を持ち、ヴィクトリア朝のリアリズム小説にも影響を与えた。このロマン主義小説の流れと並行して、リアリズム小説の分野では二大作家ジェイン・オースティンとウォルター・スコットが登場し、19世紀の小説へと移行する。

この二人の作家の時代のイギリスは、まだ伝統的な貴族や紳士階級が社会的にも、文化的にも支配していた。が、1840年代までにはこの状態は産業革命により一変する。それは中産階級の台頭によってであった。この事実文学も当然無縁ではなく、小説は特にそうであった。この時代に急速に増え、時代の支配者となった中産階級が、娯楽としての小説を求め、小説も不特定多数の読者のために最初から出版する目的で書かれるようになった。

そして読者層も中産階級だけではなく、労働者階級も加わってきた。それは彼らに識字率の普及と、印刷産業の発展によって書物が大量に、しかも安価になったことが大きな原因であろう。こうしてヴィクトリア朝期はイギリス文学史上まれに見る小説の時代を迎えることになった。

こうした事実を背景にして、ヴィクトリア朝期の作家たちは、概して産業革命がもたらした諸悪、例えば物質万能主義、拝金主義、俗物根性、階級差別、都市の貧困と犯罪の増加などを糾弾した。このような事ができたのは、ひとえに厚い読者層が誕生したからである。

#### IV 『オリヴァー・トゥイスト』、『大いなる遺産』、『ジェイン・エア』、『嵐が丘』

これらの作品には大まかに言って二つの共通点が見受けられる。それは主人公が孤児であるという点と、階級や生まれが主人公にとって何等かの障害や差別になっている点である。オリヴァー少年の母親は彼を救貧院(poorhouse)で産み落とした直後に死んでいるし、ピップも身寄りも姉しかいない。主人公ではないが、ピップの人生に多大な影響を与えるマグウィッチは、蕪を盗んだ時に初めて自分というものに気がつく有様である。ヒースクリフはアーンショウ氏が旅行に行ったときに拾ってきた浮浪児であるし、ジェインも両親を失っている。そしていずれも階級や生まれがこれら登場人物たちに、何等かの障害や差別を与える。

オリヴァーは孤児で、しかも救貧院で教区吏員のバンプルに虐待を受けるだけでなく、その後徒弟として奉公勤めをした葬儀屋でもいじめられる。そしてそこを逃げ出した挙句に、ロンドンの泥棒の巣窟の主フェイギンに捕らえられ、むりやり泥棒の片棒を担がされたり、すりの濡れ衣を着せられたりする。

ピップも姉しか身寄りのない孤児であるが、姉の夫であり村の鍛冶屋のジョーと貧しいながらも楽しく暮らしていた。が、エステラと出会い、田舎者と馬鹿にされてからは自分の身分と境遇に不満を持ち始める。そして贈り主不明の準備金を使って紳士になるためにロンドンに上京する。そして前述のマグウィッチもまた孤児で、身分が低く教養もないために幼少の頃から辛酸をなめ、紳士然とした泥棒の相棒に罪をなすりつけられてしまったという辛い経験を持つ。

ジェインも両親を失っているがために伯父のリード氏とはいえ、他人の家で育てられる。しかも心の狭いリード夫人と乱暴な彼女の子供たちにいわれのない虐待と差別を受ける。その後もロウウッド慈善学校の管理者のブロックルハースト氏によって全校生徒の前で屈辱を受ける。また、イングラム嬢たちにもガヴァネスという低い身分を馬鹿にされ、笑い者にされる。

ヒースクリフは浮浪児であり、自分の名前とか、生まれた場所とか

が分からないばかりでなく、国籍すらはっきりしない。このような彼と仲の良かったキャサリンが、年頃になった時に彼とではなく、金持ちのエドガーと結婚する。その理由はヒースクリフとは異なり、エドガーと結婚すればお金持ちになり、令夫人になり、得意になれるからと彼女は説明する。

文学作品が当時の社会を映す一つ的手段であるならば、これらの作品はいずれもヴィクトリア朝社会をよく反映している。「二つの国民」つまり「富めるものと貧しきもの」という当時の社会の図式が作品の中に描かれている。これに加えて産業革命以降の社会は経済的社会的利害を異にする三つの階級からなる社会である、という見方は既に述べた通りである。土地所有者（地主）、資本家、労働者、あるいは、上流階級、中産（中流）階級、下層階級という見方がそれである。先に取り上げた作品の主人公たちは、いずれも「貧しきもの」、労働者、下層階級に属する人々である。マグウィッチにあっては、生きるために止む得ず盗みを犯した最下層階級の犯罪者である。

## V ディケンズとブロンテ姉妹

ヴィクトリア朝期の多くの人々が「人類の進歩と繁栄」と、明るい未来を信じていたその一方で、確実に存在したのは圧倒的多数の下層階級の人々である。こういった人々の生き様や社会との関わり方、社会における待遇を描き、批判した多くの文学者の一人がディケンズである。彼は『オリヴァー・トゥイスト』で当時の社会問題、ロンドンの暗黒街、盗賊団の巣窟、都市のスラム、救貧院や救貧法(Poor Law)など、以前からすでに読者の関心の的となっていた問題に焦点を当て、描き出し、世間の人々の心に広く訴えた。特にこの作品のなかでの救貧院と救貧法の描写にはディケンズの社会批評家あるいは社会改良家としての押さえがたい責務や使命感、激しい気迫といったものを感じる。

ディケンズは作品のなかで、貧しきものをむりやり救貧院へ入れることの不合理さを非難し、さらに救貧院そのものの欠陥として、貧しい食事、バンプルに代表されるような無能な役人、子供の待遇の不備

を強調し、糾弾しているのである。救貧院がどのようなものであるかはバンプルの尊大な態度やオリヴァーの“Please, sir, I want some more.”<sup>1</sup>という言葉がすべて物語っている。これにとどまらず、ディケンズは当時の支配的思想の一つであったマルサスの人口理論やベンサム功利主義にも、弱きものと貧しきものを切り捨てる思想として攻撃の矛先を向けた。

『大いなる遺産』のなかでもディケンズは欲得の世界を巧みに描き出し、当時の社会の拜金主義的な体質と紳士階級に対して容赦なく批判する。マグウィッチは「紳士気取り」の相棒コンペysonに裏切られ、裁判で偏見と差別に基づく不当な判決を受けたことをきっかけに、紳士階級とそれをありがたがっている人々に怒りを覚え、復讐を決意する。そこでピップへ対する恩返しという形を取って、マグウィッチは金を流刑地から送り、彼を紳士に仕立てあげる。マグウィッチの思い描く紳士象は「安楽に暮らすこと」ができ、「働かなくてもよい」身分である。労働をしなくても暮らして行ける紳士なるものは当然、労働をする者がいなくては成り立たない。ピップを紳士に仕立てあげ、金の出所を告げることによって、マグウィッチは紳士階級とは労働者の犠牲の上に成立している階級であることを証明する。その上、ピップが期待していた「大いなる遺産」とは、世の中が忌み嫌い、のけ者にしてきた犯罪者の労働によって作り出されたものであるという事実も明らかになる。

世の中に対するマグウィッチの

“blast you every one, from the judge in his wig, to the colonist a stirring up the dust, I'll show a better gentleman than the whole kit on you put together!”<sup>2</sup>

という強い気持ちは、彼の復讐心の現れであろう。なぜならピップのような学問のない貧しい労働者階級の子供でも、大金さえ手に入ればロンドンに出て行って、紳士になり、皆からありがたがれることを証明することによって、紳士とはその程度のもの、つまり金さえあれ

ば誰にでも「俄か紳士」になれるのだということが明らかになるからだ。ピップが紳士になることを知って態度を急変させるパンブルチュックやトラップを見れば、紳士に頭を下げ、ありがたがる人々は、紳士そのものではなく、紳士に付随する「金と権威」をありがたがっていることがよくわかる。

このようにディケンズは人間万事金の世の中という考えに取りつかれている人々を批判し、紳士階級の生活が労働者を犠牲にした贅沢と怠惰と傲慢をとったら何も残らない生活であることを証明する。人間に一番大切なのは何かということ、ジョーやビディーに代表される勤勉、純朴、人間同士の愛の世界に、結局はピップが戻ってくることによって教えている。

『嵐が丘』の作者エミリ・ブロンテはディケンズとは異なり、社会批判や社会改革の使命を念頭において作品を描いたのではない。が、それでもやはり、ディケンズと共通の意識が作品から読み取れる。『嵐が丘』の舞台となるのはヨークシャー地方であり、時は18世紀の終わりである。この地の嵐が丘荘に住むアーンショウ家はヨーマン階級であり、スラッシュクロス屋敷に住むリントン家は地主階級であり、家長の仕事は治安判事である。このロンドンから遠く離れた、ほとんど人の出入りもない、閉鎖的な土地に住む二つの家族には、抑圧的かつ排他的な家父長制が存在する。この中に突然孤児のヒースクリフが入りこむ。当然この馬の骨とも分からない彼をリントン家は拒絶し、彼と一番仲の良かったキャサリンでさえも、数週間リントン家に滞在しただけで、豪華な装飾品に代表される物質的な豊かさが持つ世界の価値観に染まってしまう。そして彼女は結局ヒースクリフではなくエドガーと結婚する。これを機にヒースクリフは両家に対して復讐を誓う。数年後、裕福になった彼は、あらゆる手段を尽くして復讐を実行し、アーンショウ家とリントン家の両家族を解体し、嵐が丘荘とスラッシュクロス屋敷の財産すべてを手に入れ、両家の家長として君臨する。ヒースクリフはなぜ復讐を誓ったのか？キャサリンの結婚を機に、自分が彼女と共通の魂以外—教養、家柄、地位や財産も—何も持たないが故に、つまり階級が異なるが故に、自分が不当に評価され、扱われた時に、社会



が抱える害悪に気がついたからである。

だが彼は結局復讐すべき社会の階級差別の中に両家の家長となって身を置くことになり、自らがかつての復讐すべき対象となってしまふ。キャサリンがヒースクリフとではなく、リントンと結婚したのは極めて自然で冷静な判断だったとも言える。彼女の言葉“*It would degrade me to marry Heathcliff,*”<sup>3</sup> という通り、当然経済的精神的な不安もあっただろう。当時女性が経済的自立をするのは難しく、ガヴァネスとして身を立てるぐらいしか手段はなかった。

そのガヴァネスの職業で自立したのは『ジェイン・エア』の主人公ジェインである。彼女もまた孤児で、しかも女性である。作者シャーロットはジェインを通してさまざまなものを映して見せている。それは当時の家父長制社会で自立しようとする、多くの女性が突き当たり、克服しなければならない問題である。例えば、それはゲイツヘッドでの抑圧と差別、ロウウッドでのいわれなき差別と飢餓、ソーンフィールド屋敷での男性中心社会、セント・ジョン・リヴァーズ家での犠牲の要求などである。

ジェインは彼女が孤児であることや、女性であること、ガヴァネスであることを顧みず、自由、独立、平等そして男女平等の愛を一貫して求める。それは雇い主ロチェスターに対してもその姿勢を崩さない。またジェインは彼女の知らない世界への憧れや、更なる知識への欲求をも見せる。それはジェインがロウウッドを去り、ガヴァネスとして新たに職を求める時の気持ちを表した次の言葉の中に見て取れる。

“now I remembered that the real world was wide, and that a varied field of hopes and fears, of sensations and excitements, awaited those who had courage to go forth into its expanse, to seek real knowledge of life amidst its perils.”<sup>4</sup>

またロチェスターがジェインを「天使」や「妖精」扱いしたがる“*I will not be yours.*”<sup>5</sup> と断言する。このことから、当時「家庭の中の天使」という概念を押しつけられていた中流階級女性の全般の怒

りを代弁しているとも考えられる。このようにジェインの姿を通して見えてくるものは、当時レディとして求められる礼儀作法や、上品さ、実務能力以外に、男性と同様に見たり、聞いたり、学んだりしたことを社会に対して生かせるような職業や活動領域に作者シャーロットが憧れていたのではないか、ということである。

だがガヴァネスのジェインが最愛の人、地主階級のロチェスターと当時結ばれるには、彼女が金銭的にも対等になる必要がある。ここにも歴然とした階級差別が存在する。そこでこの階級の差を埋めるかのように、突然彼女に莫大な遺産が転がり込む。これでロチェスターと金銭面や地位、階級が対等になったかのように思われるが、あくまでも偶然手に入れた遺産であり、自分の力で得たロチェスターとの対等の地位ではない。これは裏を返せば、当時の女性が偶然転がり込んでくる莫大な遺産でもない限りは、自由や独立を得たり、男女平等の地位を得ること、ましてやガヴァネスがその雇い主と結ばれたりすることは、夢物語に過ぎないということであろう。

## VI 時代に対する作家の共通した意識

以上ヴィクトリア朝時代とディケンズとブロンテ姉妹の四つの作品を挙げて両作家の時代に対する共通するまなざしを説明してきた。そしてこれらの作品の共通点は、主人公が孤児であり、階級が何等かの差別や障害を与えているということであった。わずか三人の、しかも四つの作品だけでヴィクトリア朝時代を語ることはできないが、この三人の作家の選んだそれぞれの主人公の置かれた立場と周囲の状況が共通しているのは興味深い事実である。この事実から推測できることは、少なくともこの三人の作家が極めて近い視点でこの時代と人々を見つめ、時代に取り残された、いわば影の部分で生きる人々を描いているということでは言えるのではないか。この作家たちはイギリスが繁栄を極め、人々がそれに酔いしれているときに、人間の評価されるべき点とは、人間が人間たらしめているものとは、生まれや性や階級ではなく、人間の有り様と、人間の生き方そのものにあるということを描き出している。つまりこの作家たちは、時代に押し流されそうにな

っていた弱きものたちの声の代弁者でもあるとも言えよう。

【参考文献】

- 相島倫嘉, 『イギリス文学の流れ』(南雲堂,1994)  
青山誠子, 『ブロンテ姉妹』(朝日出版社,1995)  
アンガス・ウィルソン, 『ディケンズの世界』 松村昌家訳 (英宝社,  
1988)  
川崎寿彦, 『イギリス文学史』(成美堂,1992)  
川本静子, 『ガヴァネス』(中公新書,1994)  
J・P・ブラウン, 『十九世紀イギリスの小説と社会事情』 松村昌家訳  
(英宝社,1992)  
出口保夫, 『イギリス文学の基礎知識』(評論社,1991)  
鳥海久義, 『ブロンテ姉妹の世界』(評論社,1981)  
長島伸一, 『大英帝国』(講談社現代新書,1990)  
松村昌家, 『ディケンズ小辞典』(研究社出版,1994)  
三ツ星堅三, 『チャールズ・ディケンズ』(創元社,1995)  
山脇百合子, 『ブロンテ姉妹』(英潮社新社,1987)  
リチャード・オルティック, 『ヴィクトリア朝の人と思想』 要田圭治,  
大嶋浩, 田中孝信訳 (音羽書房鶴見書店,1998)

【註および引用文献】

- 1 Charles Dickens, *Oliver Twist* (Penguin Books 1985) p. 56
- 2 Charles Dickens, *Great Expectations* (Penguin Books 1996)  
p. 332
- 3 Emily Brontë, *Wuthering Heights* (Oxford University Press  
1988) p. 80
- 4 Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (Oxford University Press 1993)  
p. 88 以下題名のみを記す。
- 5 *Jane Eyre* p. 333

【付記】

本論中のディケンズの『オリヴァー・トイスト』に関する記述は、三ツ星堅三、『チャールズ・ディケンズ』を大いに参考にさせていただいた。記して著者に謝意を表する。